

## 第25回国際福祉機器展において 実用タイプトランスポートビークル発表

障害児を持つ家族から、車いす以外の移動機器として良いものがないかといった要望を受け、車いすの後方に駆動ユニットを取り付ける実用タイプトランスポートビークルを開発し完成させた。その後、日本最大級の国際福祉機器展（H.C.R.'98）に出展したところ、多くの見学者の賛同を得、市販化に対する手応えを感じた。

はじめに

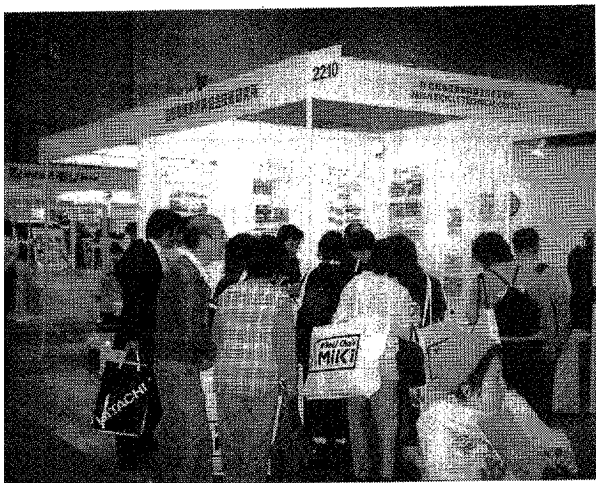
今年もH.C.R.が平成10年11月4日（水）～6日（金）の3日間、東京ビックサイトにおいて開催され、車いすをはじめ在宅介護機器、福祉車両など国内外の福祉機器が展示された。展示会の規模も昨年を上回り過

去最大の14カ国、483社による出展で、3日間の延べ来場者数も昨年実績を上回り126,162人を数えた。このうち福祉機器メーカーや関連団体を除いた一般の来場者は全体の3分の1であったが、平成12年の公的介護保険法の施行をひかえ、福祉機器に対する関心の高さ、購買層の広がりを感じた。

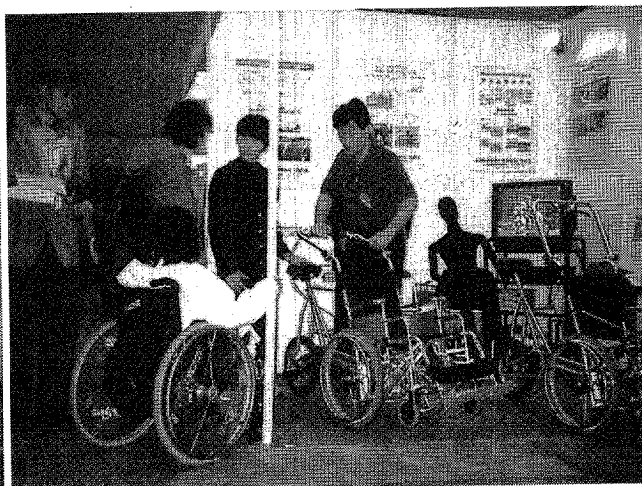
なお、今年も福祉機器展が開催されて25周年を迎え、その間900社以上の企業が出展をし、日本における福祉機器発展に寄与してきた。特に25回すべてに出展、尽力した5企業と、15回以上出展した3企業に対し、初日の展示会終了後、華やかに催されたレセプションにおいて感謝状が手渡された。



トランスポートビークル試乗



自振協技術研究所ブース



ブース展示と説明

## 福祉機器展の概要

展示会場全体の雰囲気は活気にあふれ、特に福祉車両関係のブースでは華やかさがあり、各自動車メーカーの福祉事業に対する力の入れようが再認識された。また、介護保険の導入をにらんだと思える、在宅介護関連機器の充実ぶりが目立った。車いす関連の全体的な出展の流れとして、子供用の車いすの増加が認められた。さらに、国や県レベルによる公的機関からのブースも増加しており、福祉機器開発に対する関心の高さが伺い知れた。

## 技研の取り組み

技術研究所からは、平成9年度に開発した障害児用乗り物で、実用タイプのトランスポートビークル2台を展示し、試乗も実施した。技研ブースに立ち寄られた方々は、日頃問題となる障害児・者の移動の中で、車いすまたは自動車に代わる中間距離における移動手段として有効に活用できるものとして関心を示された。さらに、多数の方々から、販売価格、入手方法といった購

入手段について問い合わせがあり、日常生活の中で利用することができる移動機器としての有用性を再認識した。また、「車椅子を購入するときと同じように、補助金の対象になるのか」、「公道も走行可能なのか」、「分解したところを見せてほしい」という質問を受け対応した。中には、「こういう乗り物が欲しかった、今直ぐにでも購入したい。これに乗って帰りたい」といった反響も返ってきた。さらに、障害児・者ばかりでなく、お年寄りの関心も高く、「夫婦でこれに乗りたい」というような要望もでた。このように、殆どの方がトランスポートビークルに高い関心と興味を示し好評を得た。そこで、今後は、障害児・者用の乗り物としてトランスポートビークルの市販化に向け、製造、販売ルートを確立させる方策を検討していく。一方、平成10年度の事業においては、幅広い年代の方にトランスポートビークルがご利用頂けるように、駆動部に電動アシスト機構を備えたタイプについても開発中である。

(技術研究所 車いす開発室)